

拘  
束  
加  
力  
裸

こう

う

そ

く

か

り

き

ら



Adult only





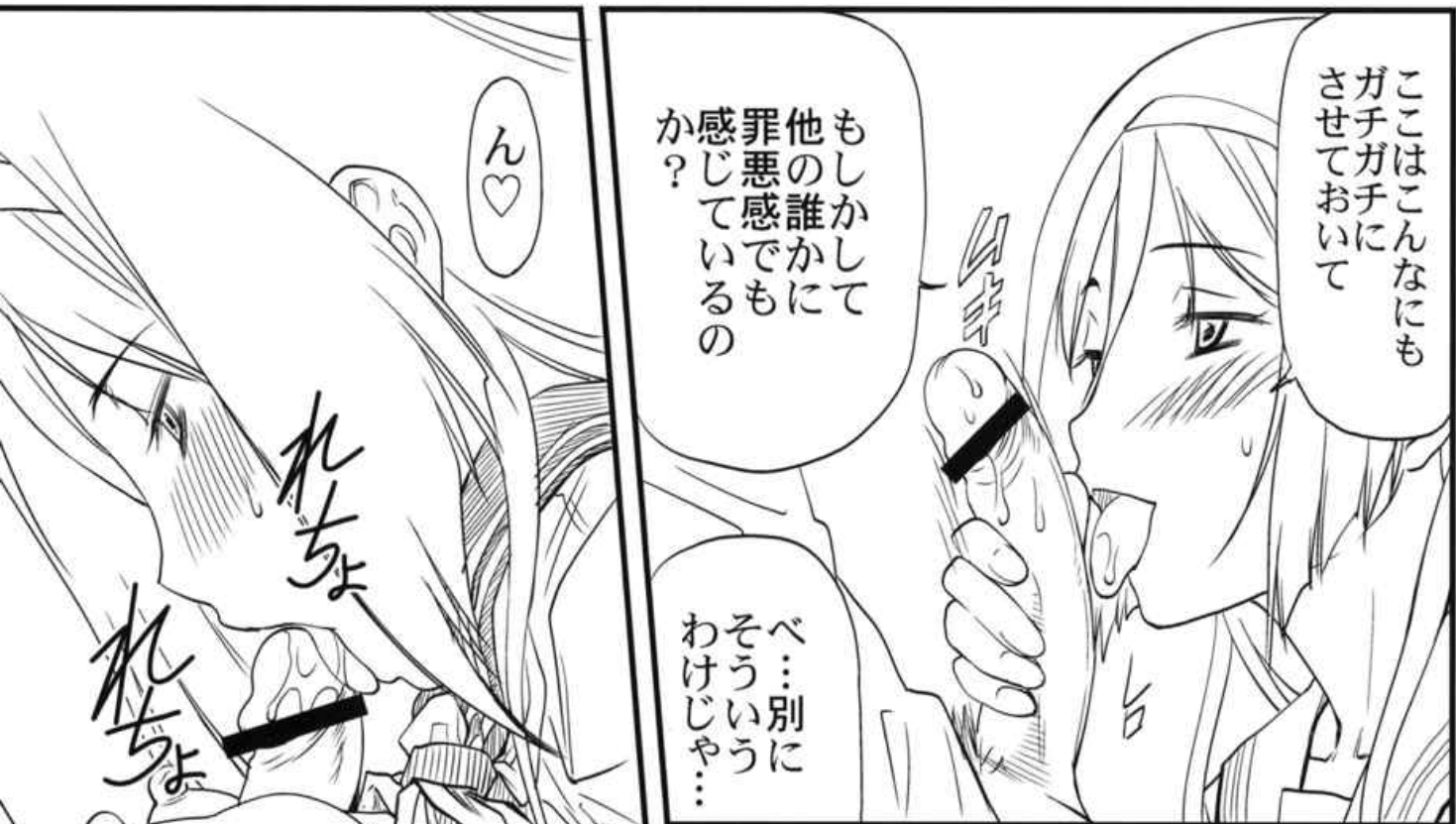
# 目次

表紙	イラストレーション	流一本	
中扉	イラストレーション	流一本	
目次			2
こみっく「とくべつ」		流一本	3
SS どうしてこうなった		白朧	23
奥付			



あの：入須先輩  
本当に  
いいんですか  
こんな事…

今さら  
何を言っ  
てるんだ  
折木君？



ここはこんなにも  
ガチガチに  
させておいて

もしかして  
他の誰かに  
罪悪感でも  
感じていろ  
か？

べ…別に  
そうじゃ  
わけじゃ…



ん♡

うっ…ああ



ふふ♡

それなら  
何も遠慮す  
る事はない  
だろ？

うっ…







どうだ？  
私の：  
お●んこは…

まっ♡

はっ…ああ  
すごく…  
いいです



んん♡

硬い…

射精したと  
ばかりだと  
いうのに…

ん

あ…あ…  
先輩…

先輩の…  
お●んこに  
挿つてる…



あつ…あ♡  
私も…

い…いい♡

気持ち  
いい♡



い…入須先輩

入須先輩は  
どうして  
オレなんかと  
こんな…

言っただろう  
君は特別だと



私は以前  
君をだまして  
傷つけて  
しまったが

これは純粹に  
君への想いだよ





んあ♡

折木くんの  
セーシ♡

ああ…♡  
ああ…♡

なかに…  
でてりゅ♡

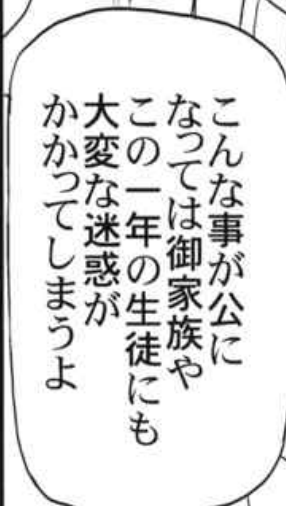
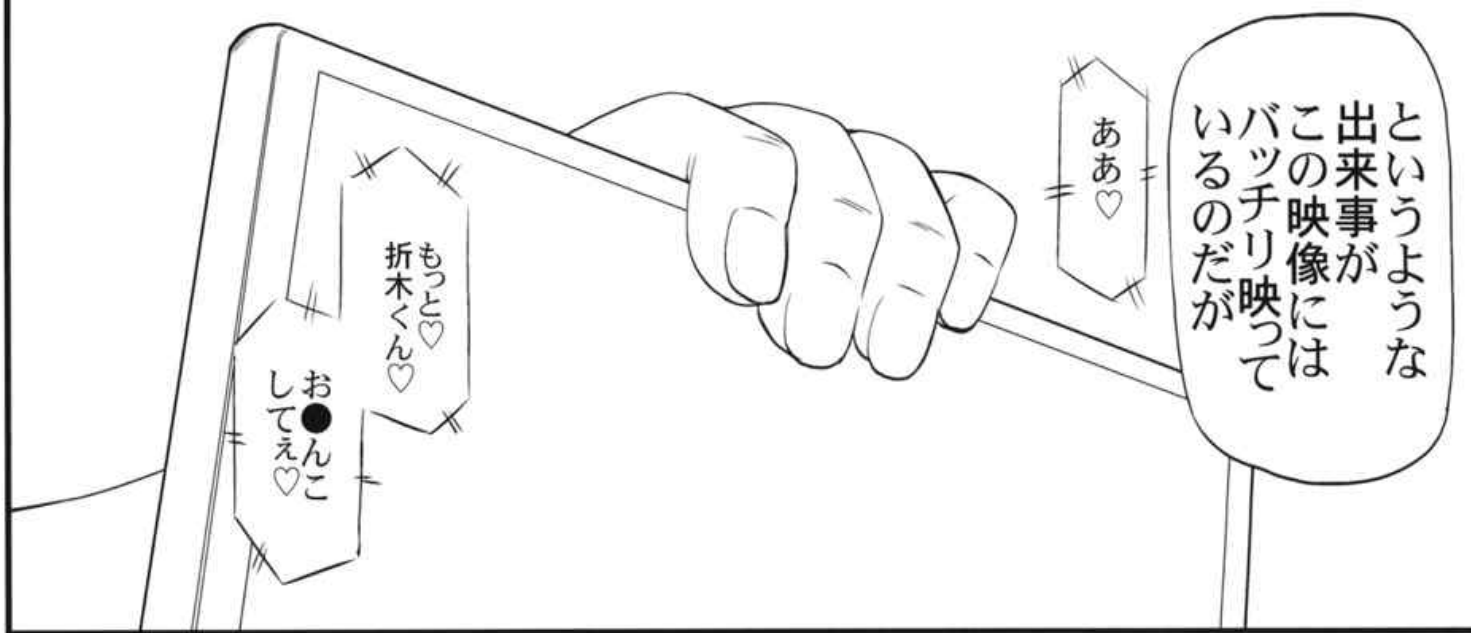
はあ♡

はあ♡

はあ♡

はあ♡





おやおや  
どうした  
ずい分息が  
荒くなつたぞ  
(笑)

ん…く

別に…  
大した…  
事…ない

さすがに  
全身をこれだけ  
弄られれば  
イヤでも  
反応するさ

あ…あ

やめ…

や♡

んあ♡

見ろよ  
このクリトリス  
こんなに勃起  
してやがる

ぬちゅ

ぬちゅ

んちゅ

んちゅ



き…  
きさますら…

はあ  
う…

この私に…  
こんな事を  
して

ただで済む  
と思ってる  
のか

はあ



んほおお♡

お？

ほおおお♡

いつてる  
いつてる

ちるる

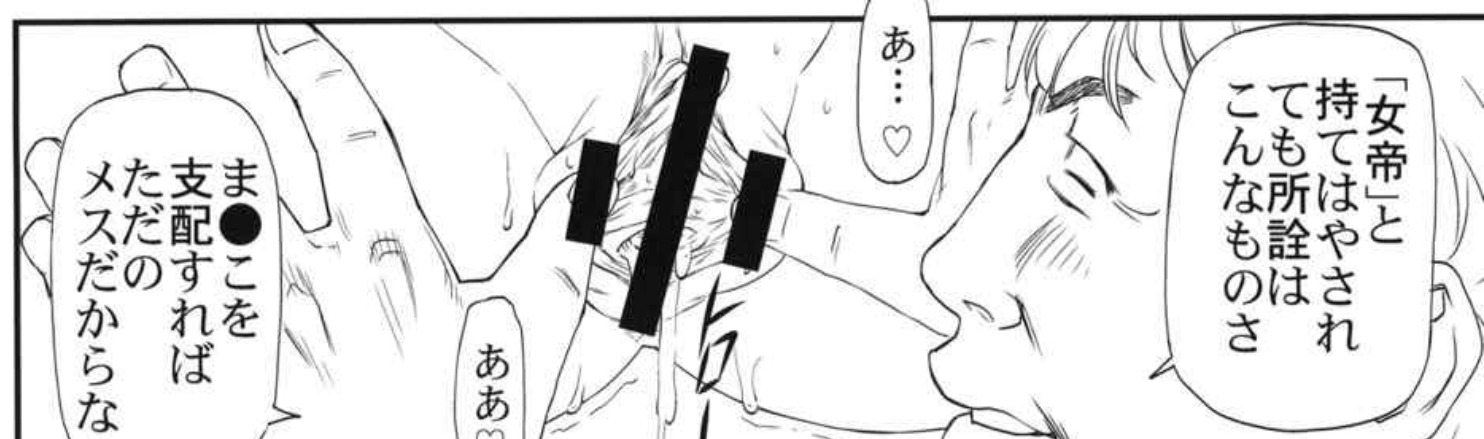


この有り様で  
凄まれても  
ねえ

後で同じ事が  
言えたら  
考えてやるよ

ンヒイ♡

あつ♡  
あつ♡  
ああ♡



「女帝」と  
持てはやされ  
ても所詮は  
こんなものさ

あ…♡

ああ

ま●こを  
支配すれば  
ただの  
メスだからな



それじゃあさつそく  
入須家ご令嬢の  
お●んこを  
いただきますか

ま…  
待ちたまえ…

今ならまだ  
なかつた事に  
するから…

だ…だから  
お願いだ

い…いや  
やめて…

覚悟しなよ  
ガキのとは  
一味違うぜ

やだ…  
やだあ

助けて  
折木くん



んあああ！

あう

ああう

おほくく♡  
入須ちゃんの  
お●んこ  
たまんねえ♡

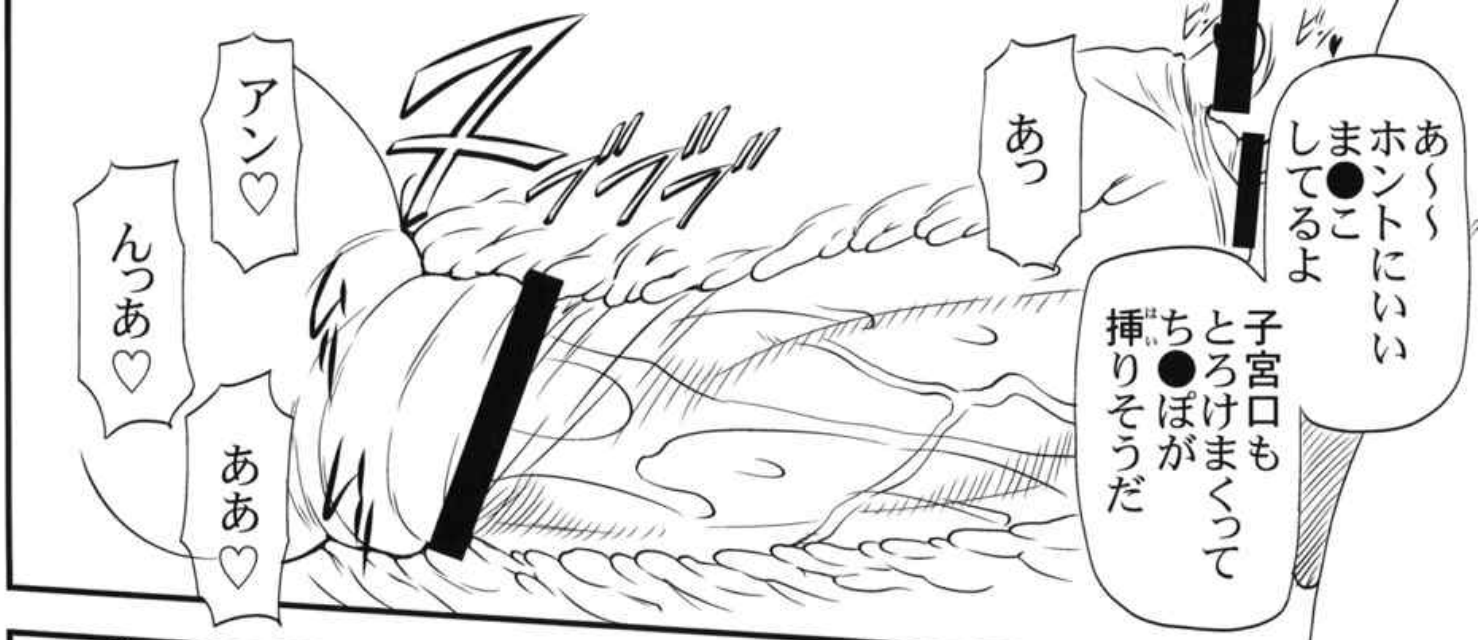
な…何コレ…？

か…は

こんな…







あーっ  
ホントにいい  
ま●こ  
してるよ

子宮口も  
とろけまくって  
ち●ぼが  
挿りそうだ

あっ

アーン♡

んっあ♡

ああ♡



直接子宮に  
種づけして  
やるからな

受精しろよ  
入須！  
妊娠しろ！

うっ…

んああっ!?

い…  
いやあ！

やめ…てえ

あ…はああ…

おお…お…

ア♡

ア♡



スッ  
う…むう

フク  
もつと  
奥まで  
流し込んで  
やる…

ふ—  
ふたごれ

あ♡

あ〜♡



じや  
次オレね  
シラハハハハハ

あ…あ〜♡









いぐ♡いぐ♡  
肛門イぐ♡♡

あゝ♡



お…おお♡

んおお♡

あ…あ♡



んああ♡  
ミルク  
出ちやう♡

勃起ちくび  
うまいか

ん♡

ん♡  
勃起ちくび  
おいしい♡  
です♡

ちゅ



キス♡

キス♡♡



あへ♡

あへ♡

ち●ぽ  
いいのお♡

もっとお♡

イイ♡♡♡

へへ  
もう完全に  
堕ちたな

意外と  
あつけなかつ  
たな

ち●ぽ  
♡♡



んおお♡  
んきゅう♡

私の子宮  
ガバガバに  
なつちゃう♡



オオ♡

もっとお♡

ンヒイ♡

もっとお  
肛門  
壊れてえ♡







あーあ  
子宮がとび出て  
丸見えだよ

こりやもう  
●校生の  
ま●こじや  
ねえな(笑)

おお♡

肛門も裏返つて  
べらべらに  
なつちまつたけど  
大丈夫かコレ?



おもしれえから  
そのまま上に  
向ける

おつ  
アレを  
やりますか

あ…あ?

や…  
らめえ…



ち●ほ挿れ  
すぎてもう  
グニヤグニヤだ



おふ♡

お…♡



おほおほ

びゅん

おほおほ

おほおほ

おほおほ

おほおほ

びゅん



すまない  
折木君

どうやら君は  
私の特別では  
なくなつた  
ようだよ

あへええ

私の  
特別はもう

もうすぐ  
出産予定日  
だが大丈夫  
なのか？

ん♡

ん♡

ちやんと  
入須家の息の  
かかった病院  
を用意して  
おいたから  
問題ないさ

んむ♡

そういえば  
知ってたか？

お前が捨てた  
あの折木つて奴  
千反田んとこの  
娘に手を出して  
町を追い出さ  
れたつてよ

ああ  
何をトチ狂った  
のか  
バカな奴だ





# どうしてこうなった

「どうして、こうなった」

今日は、千反田の家に呼ばれた。出迎えた、えるは、大正の女中(メイド)姿していた。ほら、折木さん、どうですか？」

桜色の猫足緋の柄の着物に紺の袴、袖なしの白いエプロンをつけて、頭の上には白いワリルのついたカチューシャだ。恐ろしく破壊力のある姿だった。千反田の手料理を「馳走になることになり、その祭、千反田はメイドを楽しんで甲斐甲斐しく世話をやく。奉太郎は、メイド姿のえるを見ると、劣情が抑えきれなくなりそうで、極力、視界に入れないようにしていたが、えるの世話焼きは段々エスカレートしていった。

「折木さんは、興味がないんですかッ？」

「そ、そんなことは……」

奉太郎の視界一杯にえるの顔が迫ってくる。

「わ、私には魅力がないんでしょうか？ こんなに折木さんに興味があるのにッ！」

えるは慌ててエプロンを取り払うと、ゆっくりと椅子の背にかけた。

そして、ぐいと襟を開き、ブラジャーのフロントホックを外す。

「えッ？ まてッ……」

ブラジャーのカップが左右に分かれ、内側に収められていたまっ白なポリウラムのある乳房がたゆんとこぼれる。甘い香りが鮮明に立ちのぼった、えるの肌からこぼれる体臭が香る。奉太郎は、慌てて背を向ける。

「こっちを向いてください」

奉太郎の座っている椅子の前に回り込むと、奉太郎の前に跪き、ファスナーをぐいと引き下ろし、男根を取り出した。

「もう少し浅く座ってください。少し、やり辛いです」

奉太郎は徐々に立ち込める。千反田えるの女の芳香に逆らえず、ゆっくりとした動きで座り直した。えるは半勃起状態の男根の先端を指先で掴み引っ張り上げると、乳房を下から持ち上げるようにして、胸乳で肉茎を挟んだのである。

「うっ、うっ、ち、千反田……」

ポリウラムのある乳房のたゆんとした感触と、えるの体温が、奉太郎の肉棒を両脇から挟み込んで押し付けてくる。えるの乳房はいかにもふんわりと柔らかさそうに盛り上がっているのに、実際は張りがあり、かなりの圧迫を肉棒に与えてくる。

それでいて、胸乳の谷間は引き締まり、うすらと最低限の脂肪しかついていない。

「んんっ……はあはあ、う、くっ、くっ、ふっ……あッあッ」

えるはぎゅぎゅと力を入れて乳房を押し揉んでいる。乳房に指がめりこみ、ピンクの痕がつくほどだ。

「はっ、お、折木さん、気持ち……いい、ですか？」

「あ、……き、気持ちいいよ」

裏筋の感じやすいところが、谷間に押し付けられ、擦られて小刻みに刺激を与えられる。乳房が目の前にクニクニと歪み、ふくよかな稜線を引く谷間から、頭を出した亀頭が左右に振れる。先端の肉の実が濃いピンク、猫足緋の柄の着物も同じく濃いピンク色の間に挟まれた乳房の白い肌が眩しいほど際立って見える。

しかも、えるの欲情に歪む、淫靡な表情を浮かべる貌が妖しさを醸し出す。

「んっ、んっ、あああ……、んあッ！」

えるは指に力を入れて乳房を押し揉んだ。揉めば揉むほど、感じれば感じるほど乳房が重く感じる。物理的ではなく、内側から湧き上がる甘く痺れる疼きが、重さを増したかのように感じさせるのだろう。

「はあ、おっぱいが、か、感じて……、どんどん重くなってますッ」

「はあ、サイズリが、こんなに、気持ちいいなんて……」

奉太郎の男根を胸の谷間に感じながら、自分で乳房を揉みしだくのは、どんな器具を使った才士より気持ちよく感じられた。奉太郎が感じて歪ませる顔も、自分の胸乳の谷間から覗かせる亀頭も愛おしく見えてくる。男を悦ばせるという充足感だろうか。

「あぁっ、あっ、んっ、んんんっ……、はあッ」

おっぱいの内側がキュンキュンして、その疼きは体内を經由して子宮に到達する。

(ああ……、子宮が疼いてきました)

子宮の疼きは、女の舐めを受け入れる準備を整えて発情し始める。一旦始まると、痛いほどの舐めは精液を受け入れるまで収まらない。奉太郎のペニスは、徐々に硬くなってくる。この肉棒を膣内に収めたいという欲求が湧き上がってくるが、それをぐっぐっとする。

早急に受け入れるより、我慢した方がより昇まることが経験からわかっていた。

奉太郎は、内から出る欲求に耐えていた。千反田の悶える貌はその欲求を加速させる。千反田のだんだんと激しく揺れる、柔らかな双丘を見ていると新たな欲求が湧き上がってきた。

「……縛りたい」

ふと、その欲求が口から溢れる。すぐさま口を抑えるが、溢れたものは取り返しがつかなかった。

「え……？」

その声に反応して、えるは乳房を押し揉むのを止め奉太郎を見上げる。

「縛る……」

その意味を吟味して、理解した頃には、千反田えるの瞳は、例の光を溢れさせていた。

「折木さん、私、気になりますッ！」

えるは身を乗り出した。その拍子に手が、局部を擦る。

「うっ……」

突然与えられた、方向性の違う刺激に、危うく精を放つてしまいそうだった。

「あ、すいません」

えるは、奉太郎の表情と、局部を見比べて、くすりと口を緩ませた。身を乗り出した拍子に胸にかかった黒髪を背中の方へ追いやった。再度、奉太郎の肉茎を乳房で挟みなおす。揺るがすようにして刺激を与え始める。先ほどとは代わり、もどかしいような、しかしおだやかな興奮が、奉太郎に満ちてくる。えるは、乳房を内側にキュウツと奇せる、首を真横に倒し、胸乳の公間から顔を覗かせている亀頭に舌を這わせた。唾液を纏った熱い

舌が、剥けた先端を刺激する。敏感な部分なので舌の味蕾の刺激がたまらなく感じる。

「うっ！」

えるの舌は尿道口に差し込まれ、間断なく刺激を送ってくる。ちゅつと先端部分にキスをして、また亀頭部を舌で舐めまわす。

「うっ、うっ！」

奉太郎はあまりの快感に腰をひねった。

亀頭が舌先でぬるぬると舐め回され、裏筋は胸の谷間との間で、溢れてきた唾液を潤滑油にして擦られている。奉太郎の快感はすぐに昇つていく。両脇から押さえつけられた胸乳と谷間で圧迫され、今にも決壊しそうなダムのような高まりになっている。

「うっ、うっ、うっ！」

「れろっ……、んんん……。はあ……、んっ」

えるは、なおも激しく舌を使った。唇を尖らせてキスする感触も、舌を大きく出して亀頭を舐めしやぶつる感触も、奉太郎の快感を増幅させていく。えるは、口を大きく開け、亀頭を啜るように吸い付いてきた。突然始まったパキュームに、肉棒は決壊した。

ドブツ！

突然襲ってきた高波のような心地よさに身をゆだねる。

「うっ、めんっ！」

パイプリで射精したせいで、えるの口腔だけでなく、鎖骨や乳房にまで精液のシャワーで汚してしまう。

「きゃっ、……んん、ちゅっ、ちゅっ、んっ……、はんっ」

えるは射精中のペニスを精液を搾るかのように舐め回した。

「うわっ……くっ」

射精の最中で敏感になっている亀頭を、熱い舌が舐めしやぶる感触は、おそろしく気持ちよかった。さらなる快感に射精の勢がいつそう強くなっていく。

ドブツ、ドクドクッ

えるの綺麗な顔が、精液で汚れていく。うっとり目を細めた表情が淫靡だった。

「う、うっ……」

「くちゅっ……ちゅばあつ、んんっ」

顔に精液が掛かるのに一瞬躊躇したが、えるはすぐに先端を浅く啜えた。そして、口腔に溜まる精液をちゅるちゅるを吸り上げていく。

「ち、千反田ッ」

奉太郎は、悲鳴のような声を上げて腰をひねった。

えるがぐくんと嚙下するとき、口腔が狭くなって亀頭が圧迫される。しかも奥へと吸引される。口唇いっぱいには白い精液が溜まっている様子も、口の端から溢れる様子も、おそろしく淫靡に見える。えるがぐくんと喉を鳴らして口腔内に溜まっていた精液を飲み込んだ。そして、立ち上がって髪を振ると、はふうん、と色づぼくため息をつく。

「……ん、おいしいです……」

えるの着物の袴を縛っていた腰紐を、乳房の前後に巻きつけて引張り、胸の真ん中に蝶結びを飾る。赤い紐が白い胸元に愛らしく飾られて、乳房がいつそう大きく突き出した。大きくゆるんだ着物の衿から、両の乳房が出ているだけでもたまらないのに、赤い腰紐で前後を戒められている。扇情感を煽る光景だ。

「折木さん……」

えるは目を赤く染め、うつりした顔で熱い息を吐き、両手を揃えて差し出した。

「……うん」

奉太郎はぐくりと口内に溜まった唾液を嚙下し、ゆつくりとえるの手首に腰紐を巻きつけていく。紐が長く残っていて、ふと天井近くの梁が目につく。視線に釣られてえるも視線を天井近くの梁に向ける。

「私……、気になりますッ」

近くの椅子を引き寄せ、天井の梁から出ているフックにえるの両手に繋がる紐を結びつける。足が簡単に着く高さで、吊っていると言いが、その光景はエロティックな雰囲気を出す。袴も足袋もきちんと纏っているのにやたらと扇情的だった。

「あつ、ああああ」

五十センチの竹尺がえるのお尻を撫でるとき、またなにもしていないのに、叩かれる想像で軋がブルブル震えてしまう。

「よっ」

奉太郎が竹尺を振り下ろす。パシンと子気味よい音と共に、袴の上から左の臀部に衝撃が走った。感電したように震えた。子宮が揺られて、キュンと甘く疼いてしまう。

「きゃッ」

「だ、大丈夫か……?」

「平気です」

「そ、そうか……」

奉太郎は、竹尺の角でゆつくりとえるの体をなぞっていく。背中、脇、脇腹、臀部へと。先ほど打ち付けた臀部の赤い筋の所までたどり着く。

「あつ、ああああッ」

叩かれて敏感になったところに触れられて、ソクリとくる戦慄がえるの背筋を走り抜けていく。子宮まで反応して感覚が弾ける。子宮頸管粘液がドブリと出て、シヨーツの内側を濡らす。奉太郎はチースケキのような匂いに気づいた。えるの軋は刺激によって反応していた。目尻がピンク色に染まり、乳首がツンと尖り、赤いテカった舌が唇を舐める。子宮の発情に、腰を揺らしていた。奉太郎は、そのえるの痴態に抑えられなくなった。

竹尺を先ほどより力を込めて振るった。

「きゃあつ、きゃああつ、あああ、だ、ダメですッ!」

竹尺が臀部に当たり、その弾力を腕に伝える。その手応えは甘露のように感じられた。

「あああ、んっ、……はあ、何か、くるっ」

えるはその場で脚をばたつかせ、身を振り、腰を捻り、乳房を揺らしながら悶える。唇の端からは涎が零れる。

「い、痛いッ!」

痛覚を伝える悲鳴に、奉太郎は少し冷静さを取り戻す。

「あ、い、い、めん……」

竹尺を放り出し、えるの体を支える。しかし、その手が袴の上からお尻を撫でたとき、いきなりえるが震え出した。

「あああああああッ!」



爪先立ちで伸び上がり、背筋が反り返る。そして、そのまま硬直した。足袋の間にたりと愛液が垂れた。溢れた愛液が、シヨーツを浸透し、足を伝い零れてきた。

「いつたのか……」

一瞬、あつげにとられた奉太郎は、えるがどういう状態になったのかを理解した。やがて硬直が解け、えるが目を開いた。

「ああ、折木さん……、欲しいです……」

とろんとした目付きで、おねだりをしてきた。

「ほ、ほしいって……」

「折木さんの、精液が……欲しいです」

目は焦点があつてないように見える。しかし、それゆえ女の本能に従った言葉だった。

奉太郎の方も、これ以上我慢できる状態ではなかった。少しの躊躇いのあと、えるの袴の紐に手をかけ紺色の袴を脱がす。猫足紐の柄の着物一枚と、乳房と手首に結ばれた腰紐、愛液を溢れさせたシヨーツ、そして足袋。それだけがえるの身に残されていた。着物の前ははだけ、乳房はもちろん平らなお腹も、シヨーツに包まれた股間も白い太腿からすらりとびた足もさらけ出していた。シヨーツをめくると、チーズのような興奮をそそる匂いが立ち上る。内股で下肢をすりあわせているのでおろしくいが、くっしよりと濡れたシヨーツは、捻れながらつま先から引き抜かれた。

「膝、あげて」

太腿を叩いて催促すると、えるは右足を上げる。その拍子に蜜液がポタポタと滴る。

「あ、だ、ダメですッ！」

えるが内股にしていたのでわからなかったが、秘芽は勃起して大きく膨れ、秘唇は発情して真っ赤に染まっている。しかも、ヘアが蜜で恥丘にはりつき、内腿はドロドロに濡れていた。奉太郎は、我慢できず、亀頭を斜め下からあてがった。

えるの右太腿に腕を絡めて支えながら挿入する。

「ああっ、あーっ、あああああッ」

えるが甘い悲鳴をあげた。

立ったままの挿入は、角度がなかなか合わないが、振じこむようにして挿入する。ツブツブの膣が、ペニスをみちみちと包んでくる。

「いや、きついです……あああッ」

えるは悲鳴をあげ腰をねじった。

片足立ちの不自由な大勢なので、自分から腰を回して角度を合わせることが上手く出来てない。そのとき、亀頭が真ん中の狭いところを通り抜け、子宮口を突きあげた。

「……ッ！」

えるは声もなくカクカクと震えた。

感じやすいところに受けた衝撃が、身体のコをビリビリと貫いたからだ。電気に打たれたみたいに震えてしまう。立ったまままでのセックスは、二人の身長差もあつて、奥深くまで入ってくる。子宮が亀頭で押しあげられ、キュンキュンと甘く疼く。その衝撃は脳天まで届き、絶頂までたやすく昇つていく。

「ダメですッ！ イキそうですッ！ も、もう……、子宮が……ッ！」

プチSMが効いていて、えるの軀は容易く絶頂まで導いていく。内側から子宮を揺さぶられ、キュンキュンに発情していた。だから挿入だけでイキそうになっている。

「……ッ、し、縮まるッ！」

えるの体を支えるのは、奉太郎が背中に回した腕とペニスだけだ。膣が縮まって当然だった。

「あああッ！ だ、ダメッ、キツイですッ！」

自分の体重がかかっているぶん、正常位より深度がある。身体のコを挟られている感覚に襲われる。

「あつ、だ、ダメですッ！」

えるは、その感覚から逃げようとしてつま先立ちになった。だがその姿勢は支えきれず、すぐに踵を落ち、亀頭はグリッと子宮を抉った。そのとき、目の裏でチカチカしていた電飾が、パーンと大きな音で弾けていく。重力がなくなつたかのような浮遊感に浸される。

「イっちゃいますッ！」

「うっ、うっ……、クッ」

奉太郎が呻く。ペニスがゆるゆると絡みついている膣ヒダが、振れるように縮まり、精液を吸い出そうとした。慌てて腰に力を込めてこらえる。さっき射精したばかりなのでやりすぎることができたものの、熱くたぎった膣ヒダは、溶けそうなほど気持ち良さだ。目の

前に目を閉じて口を半開きにして陶醉しているえるがいる。奉太郎は、えるの薄く開いた唇にキスをする。惚けているえるに構わず、自分の舌をえるの口腔内に侵入させ吸引し唾液を味わう。

「ん、んんッ」

まだ、惚けているえるに構わず、下から結合部を突き上げる。千反田の舐めがプルプルと震えた。舐めは反応しベラスを包むように子宮頸管粘液がドロリと出た。

「お、折木さん……？」

「あ、すまん……」

「まだ……、なんですね……」

奉太郎は、えるを見つめて頷いた。その意味を汲んだえるが微笑んだ。膣ヒタがキュキユと締めつけてきた。えるが身体を奉太郎の方に押し付け、乳房が胸板に擦りつけられる。右足を高く上げ、奉太郎の腰に巻きついてくる。抱きつこうとしたが、手は縛られて動かせなかつたので諦める。

奉太郎は、胸板に押し付けられている豊富な乳房を掴んだ。

「ああッ、ああッ、痺れますッ」

胸板に押し付けるようにしてこねながら、人差し指と中指の付け根で乳首を挟み、ぎゅぎゅと揉む。

「あッ、ああッ、ひ、ひゃああッ！」

えるは小さな絶頂をいくつも極めていくように、肌を汗まみれにして悶えている。膝がガクッと緩み、えるの身体がぐっと重くなった。

「あうっ……」

「おっ」

あわててお尻に手を回し、今にもたりこみそうな彼女の身体を支える。

えるは痙攣をほしめた。

「いやああああッ！」

先ほど叩かれて敏感になっているお尻を掴まれたのだ。たまたまものではなかつた。

「痛いッ、いやですッ、か、感じますッ！」

激痛の波に弄ばれて、えるはおろかな行動に出た。左足をあげて、奉太郎の背中に回

してしまつた。甘く痛い刺激の波から逃れようとした本能的な行動だつた。

支えるものがなくなり、腰がガクンと落ちて、子宮が亀頭で押しあげられる。子宮頸管粘液がドロリと出た。乳房が奉太郎のシャツにこすられる。

「うあッ」

奉太郎が慌ててお尻の肉を掴んで揺すり上げる。勃起した秘芽が奉太郎の陰毛でザラリとこすられた。苦しいほどの快感なのに、奉太郎に抱きしめられていることがうれしくて、甘い満足感に包まれる。

「折木さん、すきい、大好き……です……」

奉太郎がしっかりと抱きしめてくるから、なにも怖いものはない。寄せては返す波のように快感が次から次へとやってきて、波間に漂っているかのようだ。そのときとき、快感の波がえるに向かつて押し寄せてきた。目の前でまたたく光源が、大きくなり弾け散つた。

「イッチャウッ！」

えるは、絶頂に押しあげられた。小さな波はいくつも押し寄せてきていたが、今回の絶頂は大きかつた。両手を括られて吊られ、抱きつけない不安が、より刺激を深くしていた。

「うっ、うっ、で、出るッ」

ついに射精が始まり呻く。

ドロツとあふれた精液を、子宮に収めようとして、膣ヒタがキュルキュルと締まる。真ん中の狭いところがよじれるように締まるのがたまらない。

ドロツ、ドロツ

溜まつたものを思い切り吐き出す気持ちよさは最高だつた。

えるを両手で支えなくてははいけないので大変だつたが、それが奉太郎には喜びだつた。

「ああッ、またイキますッ！」

えるは背筋を反らして硬直した。奉太郎はゆっくりとベラスを抜き、えるは両足を下ろした。そして、手首の紐をゆっくりと解く。えるが奉太郎に体重を預けつたりとした。

「折木さん……、あつたかい……です」

奉太郎は腕の中で力尽きている女の子を、しっかりと抱きしめた。

終幕

## あとがき 代りのスタッフの日常つーか、クチ

白朧 毎度お買い上げありがとうございます。  
くろうさぎ お買い上げありがとうございます。して、今回のタイトルは何コシ？

白朧 「拘束髭髯」ですか？  
くろうさぎ だから、なんでそんなタイトルなんだ。  
白朧 ロマサガ2の斧技「高速十フウ」が元だ。漢字はエロくしといた。ちょっと前にロマサガ2の実況動画みてたので。

流一本 \アリだー/ アリの巣なら任せてくれ！  
白朧 ロマサガは名言多いからな。「流し斬りが完全に入ったのに」とか「先帝の無念をはらす」とか。

流一本 やりこんだやりこんだ！  
白朧 まあ、あっしは10年以上放置してたけどな。ちなみに未クリア。  
くろうさぎ ロマサガはもういい。今回は氷菓なのか。表紙は入須先輩か。  
白朧 京アニです。フルメタやってくれないかなあ。ラストまで。  
流一本 「中二病」もいいんだけどな。くみん先輩とか凸守とか。

12月某日  
サバンナにて

## 奥付

発行 リーフパーティー  
発行日 2012/12/31  
発行人 くろうさぎ

ホームページアドレス  
<http://www.ob.aitai.ne.jp/~carmin60/>

印刷所 太陽出版様

18歳未満の閲覧禁止・無断転載  
インターネットなどへのアップロード及び公開の禁止



*LeLe!まごま*

Vol. 22